

第10回バイオリフォル国際ワークショップ (東京, 2001)

益守眞也¹⁾・石井克明²⁾・鈴木和夫¹⁾

第10回目となる2001年のバイオリフォル年次大会 (International Workshop of BIO-REFOR) を、10月7日から11日にかけて日本で開催した。

バイオリフォル・プロジェクトはIUFRO (国際森林研究機関連合) に対する日本国外務省のODA 拠出金を基に、IUFRO-SPDC (開発途上国特別プログラム) の一環として1991年に始められた (小林富士雄ら, 熱帯林業 25: 60-70)。今まで筑波, インドネシア, マレーシア, フィンランド, タイ, オーストラリア, フィリピン, ネパールで催してきた年次大会において, 森林再生を念頭に菌根菌, 組織培養, 遺伝子操作といった分野の技術開発・研究にたずさわるアジア太平洋諸国の研究者たちが研究発表をおこない, 人的・技術的交流のネットワークを作ってきた。

第10回大会では, テーマを「持続的森林管理と生物多様性」と設定し, 東京大学弥生講堂で, 人工林, 増殖技術, 菌根菌, 生物多様性の4部門についての口頭とポスターによる研究発表の後, 北海道でエクスカージョンをおこなった。東南アジア地域での開催よりもはるかに渡航費も滞在費も高い日本での開催ということで参加者数の減少が危惧され



写真 1 開会式で司会の鈴木と琴を演奏した田中氏

Shinya Masumori, Katsuaki Ishii & Kazuo Suzuki : 10th International Workshop of Bio-REFOR in Tokyo, 2001

¹⁾ 東京大学, ²⁾ (独)森林総合研究所

たが、参加者は17ヶ国105名におよび、積極的に情報交換をおこなった。国際ワークショップとして大成功であったと自負している。エクスカージョンも44名（うち日本人は事務局の3名）の団体旅行となった。大所帯を引率・案内してくださった東京大学北海道演習林の方々に、この場を借りて謝意を表す。



写真 2 ポスター発表会場での情報交換

10月7日の開会式は、箏と尺八の生演奏で始められた。バイオリフォル理事長の佐々木恵彦教授（日本大学）による開会の挨拶の後、IUFRO-SPDCコーディネーターのM.クライネ博士と、林野庁を代表して森林整備部長石島操氏から祝辞をいただいた。

開会式後の全体講演では、IUFRO副会長のD.K.リー教授（ソウル大学）に「東南および東北アジアの荒廃地問題」と題しアジア地域の森林破壊の現況についての概説と再生事業の事例について、林野庁の赤堀聡之氏には「地球環境問題における林業部門の関わり」と題し、地球温暖化問題に対する政策的な取り組みについて、それぞれ特別講演があった。

各国研究者による研究発表のセッションは、7日～8日の2日にわたっておこなわれた。それぞれの日の冒頭に基調講演がおこなわれた。山本博一教授（東京大学）は「日本の針広混交林における天然更新での択伐システム」と題し、主に東京大学北海道演習林で試験をおこなっている林分施業法についての理念や実際の試験結果の報告、河原孝行博士（森林総合研究所）の「遺伝子から景観における生物多様性の重要性」と題した基調講演では、遺伝子、個体群、種、生態系、景観の各レベルでの多様性を保全することの重要性についての報告があった。

「人工林」部門では、7題の口頭発表と7題のポスター発表があり、統計的な国全体の話から具体的な植栽地の事例、人工植栽木の生理など、さまざまな観点から人工林の実状とそこでの研究が報告された。

「生物多様性・保全」部門では、5題の口頭発表と3題のポスター発表があった。RAPD分析やアイソザイム分析など遺伝子レベルの多様性に関する研究結



写真 3 紅葉・黄葉のみごとな東京大学北海道演習林での記念撮影

果がある一方で、残存する原生林の保全や持続的森林経営のための施策などが報告された。

「菌根菌」部門では、口頭で3題、ポスターで4題の研究発表があった。フタバガキやチークなど熱帯造林樹種の菌根菌について、基礎的な研究や応用技術に関する研究が報告された。

「増殖技術」部門では、4題の口頭発表と5題のポスター発表があり、熱帯造林樹種の組織培養や挿し木による増殖技術についての報告がなされた。

最後に参加者を代表してインドネシア・ガジャマダ大学のスハルディ教授から感謝と今後のバイオリフォルの発展を切望する旨の言葉があり、研究発表のセッションを終了した。

9日に北海道へエクスカーションに向かった。旭川空港で東京大学北海道演習林の大橋邦夫林長の出迎えがあり、夜は、投宿した富良野ナトゥールバルトで北海道演習林主催の晩餐会が催された。晩餐会では、林長の歓迎の言葉の後、14カ国の参加者全員が国別に歌や踊りを披露し、交流を深めた。

翌10日は、まず三の山峠の展望台に登り、北海道演習林の約半分を占める1万haの針広混交林を俯瞰した。ちょうど紅葉の最盛期で、落葉広葉樹の紅葉・黄葉と常緑針葉樹の深緑のコントラストが美しかった。林分施業法の試験地である演習林内「ボンタ」プロットも彩りがみごとで、試験地前での記念撮影では何十台ものカメラが差し出され予定時間を大幅に超過してしまった。苗

畑ではトドマツやエゾマツの育苗現場を見学した。熱帯地域では、ポットでの育苗が一般的で、また育苗期間が数ヶ月、長くても1年である。アジア熱帯地域からの参加者が多く、苗畑で山出しまでに6年もかかる北海道での育苗法は驚きであったようで、熱心に説明を聴いていた。日本各地の樹種や外来樹種を植栽してある樹木園を見学してから、山部事務所で弁当を食



写真 4 エゾマツ・トドマツの育苗法の説明を受ける

べ、午後はカラマツの品種見本林を見た後、カンバ類の優占する二次林での直営伐採現場を見学した。グラップルソーによる大径材の玉伐り作業は壮観で、参加者全員が歓声をあげながら見入っていた。その後、形質の優れた広葉樹大径木を個体ごとに管理している優良木施業地を見学した。1本で自動車1台が買えるほどの高価な樹木がなぜ盗伐されないのか、不思議がる参加者もいた。麓郷森林資料館で材鑑標本や林業用具などを見学してから宿に戻った。

翌11日は、まず北海道開発局の十勝岳火山砂防情報センターに行き、大規模な流路工やテレビモニターによる火山の監視システムなどを見学した。その後、国立大雪青年の家に向かい昼食をとり、旭川空港から東京に戻った。あいにく雨が降っていたため、冠雪しているはずの大雪連峰を望むことはできなかったが、参加者は自分の吐息が白くなるのを見て、北の国に来たことを実感しているようだった。

BIO-REFOR は Biotechnology-assisted Re/afforestation in Asia Pacific Region の略号とし、主に組織培養や菌根菌を利用した熱帯林再生を趣旨とした活動してきたが、今までの10年間を一区切りと、2002年度からは生物多様性をキーワードとして加えることになった。新たな理事として森林の生物多様性に造詣の深い2名を迎えて、Biodiversity and Re/afforestation in Asia Pacific Region として活動していく。今までの活動で築き上げてきたネットワークをさらに拡大し、科学的知見に立脚した森林再生の方策を探究していくというものである。新たな体制でのBIO-REFOR年次大会が2002年10月に韓国で開催された。この大会については稿を改めて報告する。